世說新語

三五八

近世異説奇聞巻之二

淺香山怪物と捕

相撲の起ハ。垂仁天皇の朝に野見宿祢當麻蹶速と力と爭ひ。蹶速が腰とふゝ折し事國史に見えたるぞ。濫觴なるべき。其後聖武天皇乃朝小。相撲の節會はじめて行ハ也。七道諸國の相撲と召ま。衛府の官人など相撲とりしことあり。衛府ハ禁裏守護の官なれハ。武術とおくろえん為なり。又頼朝卿乃比ハ名あふ武士常に相撲とりたり。さるによりて

くゝ打に功を得し人多からき。後世此こと
絶て。武士に相撲をする人なく。相撲取とて
別に業とするものあり。諸家に百おかるまでも。
今ハ武をこすまして。遊興のやうになれば。さまでど
よく用ふ大将あらハ軍用ともなるへし近き比
淺香山角平といふ角力とりあり。これ時ハ力人
にはしえ。角力を上手なりしかバ。或家へめしかゝへ
らまし。おまへの内にてを。よれ角力といはれし
なり。或時常陸國にて勸進元をして。角力興行
せんとて。桜川といふ角力者といひ合せ數人を

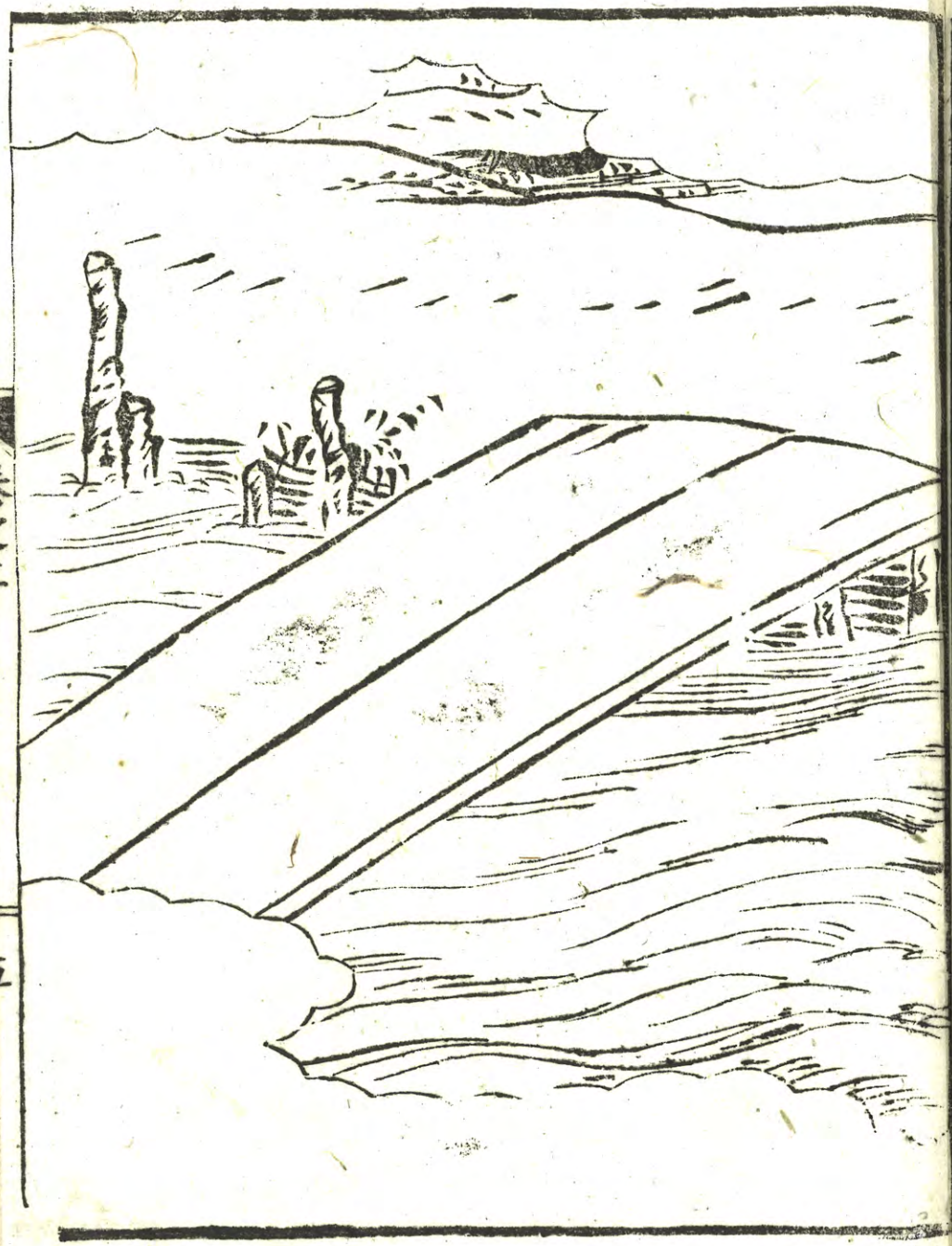
いさなひ常陸へ越き。ある村に宿をとり。晴
天五日の定にて興行しけり。此村の入口に清
き川あり。橋をかけて往來の便とす。こゝろハ
往來多く。まぶやかなれども。夜に入てハ。この
あたり一人をりふものなし。不審におもひ
て。其所を四ろに。あるじ語りしハ。此下の里
長ハ。名も見えまふごとく。家居田舎にハ稀に。
ふらびやかにて。富有の者なり。一人のむすめ
を持しが。隣所へ嫁しをせしに。程なく懷
妊しきをハ。夫親女を愛とすること淺からざり

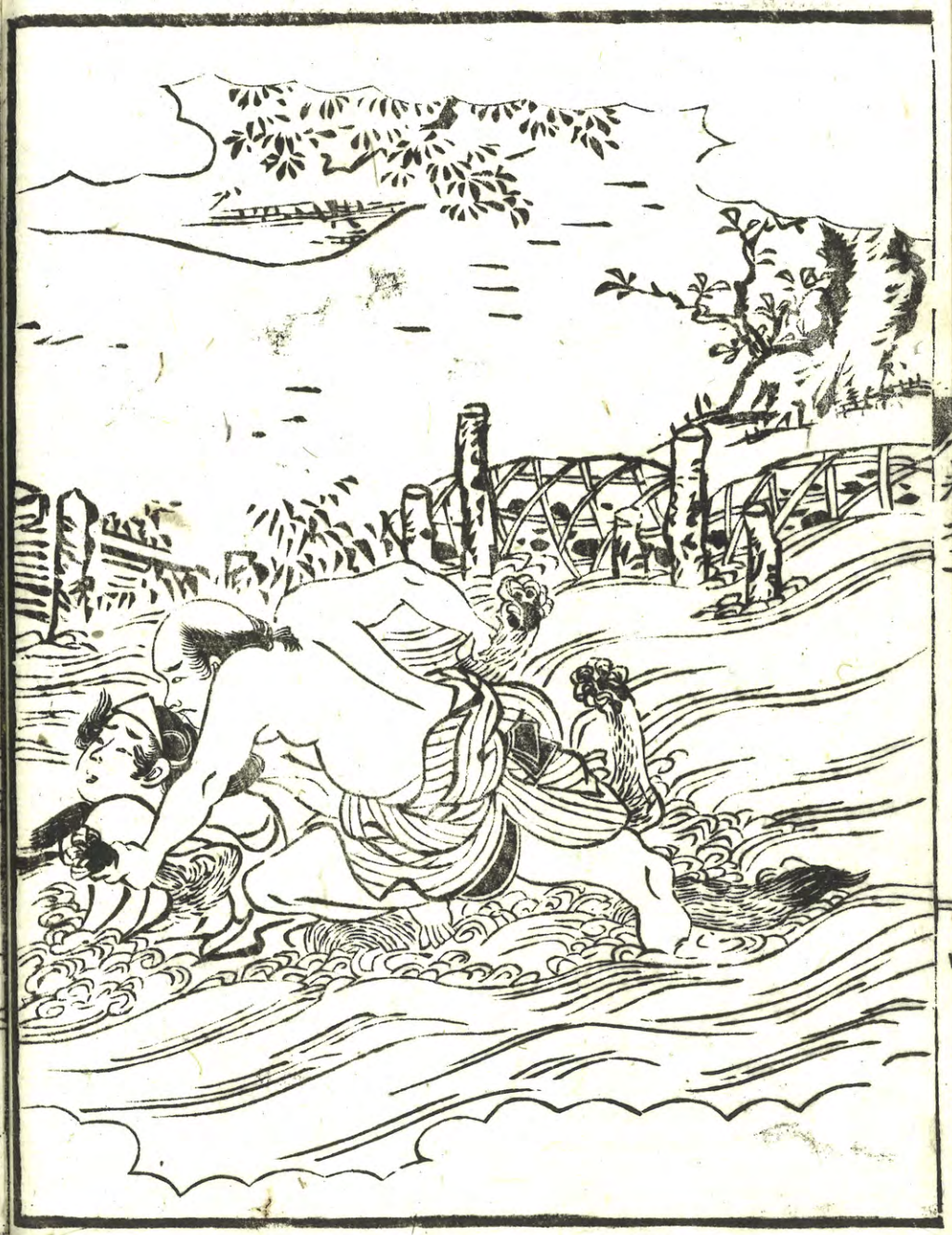
しかば。あるりとへ引とりて。心の及ぶかぎり營生し。安らかに免功させんとてよびよせ盃しか。産に臨て。此のほかふなやこ。産なことまでもなくて。死しかりかれハ。父母のなしひいふたまはなく。死ぼまも仏ず化著のこ法ふなくとり行ひしに。いかるなるや。此女和なく村の入口なる。川のほとりへ出るよしいひふせしかハ。ふ乃者どもうぬめとやらんいふもの出るとて。れそろしくおもひ。和に入てハ用ずありても。其あらりけふものなし。其上をのまでを。

此ずといひ仏へ仏をハ。西親なしこ。僧と指じて讀經などしかれども。其しるしもなく。今に出るといふ風説也。虚實ハ我才をしらざれ。奇怪なるなすすりと語りけるハ。濱香山。櫛川にいふやうハ。恂怜きすると呼つかふものかれ。ふ〻腕におぼえもなかりかふすと呼て。虚實と見とゞけぞかハ。臆せしに似たり。さいそひ今夜ハおぼろ月。夭怪を出へき頼なれハ。西人切てゐんハいかゞといへハ。櫛川呼て。ふもさこそおもへ。さりながら此夭怪。女の幽靈なるに刀とけがを

までもなし。をづかがよどうにすべしと。此ハ四
月のすゑなれハ。袷一着てさそとうぞ。身軽に
出立。二人共に鎧刀とも帯ざ。わかし薪の料
に伐おきたる木の。よころなると。三四人ばかり
に切てよに持。乃橋のあらつ〳〵ゆき。榛の志ぐり
ゑりけに身とかくし。とや出ると詩あきども。
それとおぼしお掴を見えざ。宿の生もこの
毒人出しあとにて。いかるるをとかまるやらん。我
をかまらにかくまてけて見ばやとおもひ。大きい
なる鈍と引さげ。志のびやかにもしに。鞭もやう

やうふ毒ゆけハをれさひしきといふたらなし。
もや丑三を過なんとれもふ比。川下より何か音
志らざなく鎧の呼えかれハ。さとハ見てそと詩
不に。名の上と。まかれ廿の。たゞ今うゑ出せしと
見ゆる児といふ。いとかなしげにかれ見る
をさ毒。人のれそれつるをおとまりさぞ見てかる。
ゆどなく橋のうへにあがり。よく聞なれ居る
と。洪手山飛かりまてて〳〵どうてハ。川へざんぶと
落かるとのがとまじと飛入ハ。楊川も法ぐいて飛
入。名ハあさくて乳をこさぬほどなれハ。かなる





こゝろこと弱きぞも。いづく〳〵かからきはん見えざ
るに。宿のあるし。いろのまふ来りしまや橋
の上より却りとかけ。あはあされぞきづひさ
ると力とつくきは。西人大きとひろげ弱ふ
ふに。橋のうしに。蛍のやうに光る抱のこゝろ
と。樽と以て下よりつきれば。ふし云るむと
見えるが。橋杭とはしひてきひのかると。宿
のあるしなしまておかきは。又川へ落るふと。
西人さかさぼ引ぞ〳〵陸へ上りてよく見れば。
いく年なるとも志きぬ古貍までぞありける

産婦といひしは是ようながひなしと。宿へ持
ゆり。よれ撃鮮にて出来ましと。やがて皮と剥
汁に煮て。おもひもよらぬ珍味なりと。おあひ
てうちくらひ。大酒に夜を明しぬ。はるかく
きなのりしかは。里長夫婦大によろこびて。橋
肴やうの抱ちらしてめて拘束り。西人にあひて。
ふしがむさめ。糧なに悪名とは死後の外吏
と失ひしに。各の御力として。某共は中に及ばさ
一類共まで恥辱とさしぶいる。全く御蔭
にしそはへむすめを泉下までさぞれ恨ひ

ゆんと厚く礼をのべまゐ。むしよりうぶめと云
傳へて。是に類せしまゝと。人の語りしを呼つれど。
是は淺香山が去ほに人にかくらしと。其ところは
享保年中まで。予少年の時傍にありて聞し
あかの村乃名。里長并に宿せし者の名など
まことまてつゝ。異邦にも。此方にてうぶめといふ
ものに似たることあり。酉陽雜俎に文と畧し国字とまして
夜行遊女。又天帝女とも。釣星ともいふ。
夜飛で昼隱。鬼神の如し。毛と衣て飛鳥と
なり。毛を脱で婦人となる子なし喜て人子
と取胸前乳あり。凡人小兒と飴に露處さべからず
飴とは乳とのましむるなどといふ露處とは屋ゐるを不に居ると云 小兒の衣亦露曬
すべからず 露曬とは夜そとよみまとと云 毛衣中に落ちては鳥の祟
となさべし。或は血を以て其衣に點じて誌
とす。或云。産死者の化さる所也といへり。俗
に小兒の衣服を夜外にかけれかぬものなり
といふは。是より生しまるべし

女の怒生ながら祟となる

むかしのがしといふ士ゆゑありてあるを辞し
夫ぬりろもれ。まびしき住居して年月を

れくりかふが。今ハ朝夕の烟をたてんこびきもなく。
やむことを得ざして。偕老の契を果さば。妻女
とあるやんごとなき法方へ。こやづかへに出しける。此女
世にまたぐまたる容儀といふにハあらねども。生
質いやしからざ。整相ありて。何となくえん
にあてゐる風情なりけれハ。大守の目に法ゆ。
石つかれまたさよし伝ふるといへども。夫ある
身なれハ。法ゆるし下さるべしとやせハ。すが心
にしたがひなハ。夫浪人の間見つぎぬさを重
し。十年を限て其期に及びなハ。いと思とうら

せ其時ハ夫ぬとりに。安らかふくらさをやうにたから
ひえさをべしなどのたまひけれハ。かさ〇て答
べきことぶもなく。さゆて宿へ下里夫に其よしや
ゆせ。其時法請や上べしとて。しバしのいと思と
こひ。宿へ下里夫にあひ。しかくのあにより。りたや
一日を法とかくて待ハいたまとう。他家へつゐ
へぶやとおりひて。此事やさんゐに取りたり。
とくくいと思と取ひてこべといひけれハ。まゆて
婦人の道と守里。貞節と立ちるを尤乃至。
我において満足せり。さりながらよく思按ある

へし今く困究に及ひぬれハ。宿へ下りたりとも。
とりよくしてべき便をなし。他へ行くらまん
にも。りしなゝのさいりなどいひ出されなハせん
かたをもてまじ。たとひ一旦方とけがさるとも。
其貞節の志ふなんぞことまんや。主君の心
にしたがひ。十年の間首尾よくつとめ。いとは
出なハ必りしの夫ぬとなるべし。理をまげて非
にしたがふハ本意ならぬなるれども聖賢の
としへにも。權といふことあり。權とハ。道にたがふ
とハ知ながら。事に臨てせざれハならぬとも。

それとするハ道にたがへども。却て道にかなふ道
理あるといふなり。ゝ事方のうへにて。只今貞女の
道と云ふまなハ。夫ぬともに餓死をべし。いかに
をして艱難をしのぎ後にハふたゝび夫婦
なんなをれりひ。恥辱を思ひ。主人の心に
たがはぬこそ。肝要なれといひけるハ。女ハ夫の
理にあたまることを味て。いひ出さんやうを
なく。さしうけむきてなれ居たり。夫ぬて。かく
までいふに味入らまざるハ是非をなし。夫ぬ
の縁とうらべし。夫なれハ誰に對して。逆と

たてんやうもなし。いで離別のしるし一通を志
るめんと。硯引よせくんと志るしハ。志むしと
れしとめ。おほせの趣何かハそむきけらん。よくく
おもひハ。世中にハ遊女に身をうるものもなり。
つとめ乃ふこそかつりつき。遊女となりし物ひ
まで。主人の心にしたがひ。清身の上を見つぎ
ゆたん。十年乃後ハ必りとの夫ぬぞやといへハ。いふ
まやハ乃ふ。なかことをと得心ありしハ。うれが中
にをよろこたし。問うつきハうく物ちきよこいさ
むきハ。後をのぞひ立ちき。邸中へ帰り清宗

のおりむきまにゆゆせしに。おぐさきよし清清
ゆ上よとゆゆへハ。何分にも畏なりは由よろし
く清ゆあげゝ物ならべしと。役人までゆれハ。
大守きこしめしてよろこびたまひ。それより清
朝屋となり。お清物の清方と人にうや南ハ。
大守の寵愛を浅からざ。業業日にさかんなれ。
有意なりぬるなれハ。花のもとの綾の褥月
の前乃お此盃を。照君が穹廬にありし心ち
まで。うき年月をれくりむかしほどに。いけ
しか定の手にはりぬきともいと物ふぶべきけし

さも見えざりけり。されどもいひ出さんたよりも
なくて。その年をむなしく過ごのくる年にいたりて。清
やくそく乃ごとく。もや十年に過ぬ。清いと面と
ふ面なるべしと称がひかれハ。大守大に以かり
たまひ。かくとりたてて召つふに。何の不足あり
ていと面しハやぞ。史てなるまじとおもかれハ。
ての清約束。十年の限なるに。もや十一年に
及ぬ。ハ。是非なりに清いと面と。れしうへして称が
ひかきハ。弥然甚しく。さほどにせいいと面ちら
まべし。此方よりいとまをしなハ。約束までを

対のあるよりくとりたらひえさせんと。おもひ
つきど。無理断をこふ人ハ。早速引とりぬへと。さび
しくやつ来ちきかる。お清面、おもひのなかなれば
もせんかたをなく。部屋に引こもり居たり。今を
清部屋とおがめらきしてなれハ。衣服調度と
ちしめ。よろしきようとはくしかきハ。取しに債
多かりしに。商人のなりしなきハ。此事を吹鳴
此時ならでいつとかまつんと。おまたの人清光
うけて。情もなくせめたてかれハ。衣服櫛笄
やうの物にあるまでかたとごとく代すして債と

贖ひ其方ハ二ちのまゝになりて。きのふの花乃盛を。そふハうれろひて芥となりしごとくなるハ。目もあてゝまぬ其さ面なり。あまさ乃女房の中まも。ちりまきむつましかりし。人口人。いと面ひぜんとて来りしにすくなりたてし方をたひたまふうましさよ。人にハいたしとおもひつれど和ならぬからぐるまゝハ坐てゝひたまへ。まあ方の筋なれ法なにとつゝめしハ辛ふ法宗そむきがたく。法名にしてがひつまど。十年色ハ法いちまをゝ海ハり。もとのまゝそふべきと

其のゝとたのゝて。十年も色しゆゑ。法いと面祢がひしと。むりいと面といふるなぞや。大守ちもいたまさせたまふ法方の紹をたゞ偈とのたまひ。まが方ハ女の道と失ひしる。くちとしやうゝめしや。生ながら愚女となり。今にれもひしらせ面ゆらせんと。いかまる眼に涙をうへ。面ハ朱をそゝぎしめく。髪をさかゞりぢりまて。いとすきまじきまさ面に。いづまもおそれて帰りまる。さて宿へ帰りしおもり。もつぐ〇のあくり。何となくものさとごく。おつまがさとがら髪鞘と

あらはしを誰も見しかきも見てうとひ
ゆへ里。大守のまこの君あまた聞しまと中に。清
嫡子十二歳になりたまふか。係に大熱にて。病
臥たまひぬ。其比奥より表へ出る長廊下に
奥ばめの女房あまた並居たるに。おほま髪
を乱し清嫡子の名をよびて。家ハ某の不へ
行ぞとて。中をかけりて飛行なきハいづきもあつ
こゑきふして。人にちをなき中に。おりしのの
たしかなるハ。普門不とよそて居たりなり。かく
のごとくなるすゝびくなりしかハ。六七日の間

に清嫡子かくきたまひなり。それより間もなく
其次の清子たちも。又右のごとくにて。二月の間に
こ人なくなりたまひ。来れ清子を病つきたまひ
なきハ。奥家老何うし大守へ申なるハ。打つき
たる清子幸。是たゞすにあらざ。つまが怨
念のなきと不なるべしと人々申。又清母がかく
あらはしと見てうとのも多くはへハうし
がひなれすにハ。只今全銀など賜つ。かれが
心を清なざめいて。此以後凶すあるまじきやう
申されハ。大守冷笑て。女の怨念などハ。女男

のいふすまで。丈夫の口より出さべきすにあらざ。清風がかくちと見てるといふ。おそろしくおのふひより見えしが。又ハ狐狸のなさすなるべしさて。半入る風をさどしるに来乃清子も同じやうまで。一年過ぎる内に。清子に人まぞうせたまひぬ。さて大守幼国の時。海上まで大風おこり。波濤連山のごとくあひうつ。聲雷に起ちしく。帆をやぶり橦をそぐれしかハ。水主楫取術をしくせども。岸によさとべきやうをなく。大守の清船あやうかりしと。やうく小船に移

し海いらせからうして難をのがれたまへり。されども清浩の人々悉溺死し。あまたの人の所なる五七人のみぞのちりなる。そにようて急國のと一日をし。清浩乃人数来しかハ。そまより在不へ降たまひしが。着城の後寝所へいりたまひて。よひより子の前にまでハよくいり。あまへこも。こまくよるまのちハ。寤て顔を明したまふこと。毎夜かくのごとし。近習の輩寝不近く夜不ねをつとむ。此人こうかぶひ見るに。目に抱の見やるやうまで。或ハ刀をぬきてあらり

と切ましひなどしたまふるゝびくまで。家
くるゝいしく見えたまひしが後にはけ〇八
やうになりたまひしまぞ。是ゝるおつまが祟ひ
さてやくものも多かりしとなん

愛屋某家の怪異

東都西窪のあたりに。愛さまことを業とする
ものあり。予もしまるものなり。諸家に得たる
多くして。貧うしさ暮しける。ある夜ふし
ける枕りとして。七種をとりやさ音しけり。いと
拍子よくうちたりてはしろえぬるすると。れき

て見まども。何の形もなく。音はやまざりあり。翌
朝見れば。吹火管を打たりたり。さては是まで打
たるらんとおもへども。何の不為といふことをしら
ざ新き竹をもとめおけば。是もまた打たり毎
夜くのめくなりしかば。いかさ愛狐のたぐへ
などれまぎなるへしと。あるしいひけるを。ね
ごとに七種をうちて。祈ことぬはくるしから
ねど。竹を打たるはよからぬことなり。其上隣
家の人乃きうんをいかゞなり。他のすはいとふま
じ。是をばやめてたまはれかしといひければ。その

粉よりやうやうそのうちハ。あんどうたばこぼん
などの。たのきとちうにあがり。さゆくあやうさす
あるて。妻子などたじめハ驚かれど。もとより
形のみえざれハ。ほまハなきて。つゝのすと思ひ。
おそることをなかりけるを。あるじのむすめあり
けるが。餅くぐるものなどのたぐひ。何によらず外
よりたくりし物とハ。まづ怪物どのへといひて。
器にもりて。棚へあぶなけハ。しばらくありて
なくなりけるが。むさめのんざしとよろこびゝる
まや。ある時箱に入る粉を天井より落し又

猪口にもさし燕脂などと落せり。又ある時
杉原の紙多引を出し並しに。たのきと二
階へあがりけり。かゝる物とハ何とてぬむやらんと
おもひしに。しばらくありて。真乃のしばこ
とおりて水引まてゆひたるを落しけり。是ハ
これ家の法を学びたるものゝせしにかゝるす
なし。ゆうれすとなきとうしハものかゝぬことハ
あまじ何ぞかせて見たやとおもひ。墨を
まり。紙筆をそへて二ツ〳〵あげ並けれども。物
くるとハえせざりしとなり。年の暮に餅

とつきし時。かのむすめ鏡餅をとりて。例のぬく
たまへあぎをおきけるが。其餅二階へあがらんとす
ま。たしごのふつひめこうめまでおりてハ蔵。あ
がりてハおちさるまゝひくなりしが。終まなの
かり得ざしておちけり。其あさ母。抱ありて持
てあがるやうなれども。其かたちハ見えず。餅ぞ
すりなのがるやうに見ゆ。こまとれりふまかの怪抱
ハ。かたち小く。力よりきこのとゝ見えたり。四足
のたぐひハ抱とりちて。たしごなどのがるまハ
なるまじけれハ餅の蔵しハおとこりなり。定

て跡狐のまぎこまるべし。此まかくをなりし
ゆゑ。其乃風吹とんうきことにおりひ。住和を
和へ移しけれども。前まかたるまなしと吹
しが。其のちハハかがありをんさしまゝ

近世異説奇聞巻之二終